

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年 作文の部 優秀賞

「夢に壁はない」

広陽小学校六年

由本よしもと

勇成ゆうせい

ぼくの夢は野球選手になることです。野球を始めたきっかけは、お父さんにすすめられたからです。始める前は、あんまりおもしろくなさそうだと思つたけど、始めた後は、「楽しいな。」と思いました。初めての野球はうまくなかつたし、難聴だから、きらわれると思ったけど、かんとくも、チームメイトもやさしくて野球が好きになりました。

ぼくは、生まれつき難聴の人です。九才のころに人工内耳の手術をして、ほ聴きと人工内耳をつけています。それでも聴こえにくくて、コミュニケーションを少しでもとれるように練習をしています。

ぼくは夢をかなえるためにがんばっていることが二つあります。一つ目は積極的にコミュニケーションをとることです。例えば、一緒に教えあつたり、助け合つたりすることです。これを通して仲が深まり、言葉にはできない「心のコミュニケーション」をとることができました。二つ目は、努力をすることです。「努力」という一つの言葉にも、ぼくのがんばってきたことがたくさんつまっています。毎週バッティングセンターにかよつたり、毎日基本的な技能をみがく練習をしたりです。そうして、試合で練習通りのプレイができ、活やくできるようになりました。

ここで一つぼくのエピソードがあります。4年生までは正確な目標もなく、野球をしていました。転機が訪れたのは5年生のときです。はじめてレギュラーとして出場した試合。そのとき、ヒットを打つときのうれしさに感動しました。そして、今も続く「ヒットを打つ」という目標をもてました。

このおかげでがんばることができました。

今年の甲子園、かつこいいと思つた選手が二人います。

一人目は県岐阜商の横山選手です。横山選手は左手にハンデをもちながらも「人より努力」「だれよりも努力」していた姿がかつこよかったです。

二人目は神村学園の茶畠そう志という選手です。茶畠そう志選手はぼくと同じ難聴だけれど、コミュニケーションをがんばつたりと努力をして、試合に出ていた選手です。一人とも困難を乗りこえていくところにそんかいしました。

ぼくも夢に向けて「ハンデがあつても負けない」と決意します。これからも野球をがんばりたいです。

野球以外にも、がんばりたいことがあります。それは勉強です。ここでも、聴覚障害の影きようがハンデになります。英語のリスニングがあまりできない事もそうですが、一番問題なのは、授業があまりいけない部分です。人より努力するとみんな同じところまでいけますが、そこまでいくのが本当に難しいです。でも、ぼくは努力をして、達成したいことがたくさんあります。ここで、今決意した思いをすることはできません。ハンデなんかにぜつたまけません。

ぼくの経験から言えることは「人生山あり谷あり。そんなこともある」です。障害なんて関係ない。信じて努力すれば何でもできる。ぼくは、この可能性をみんなに伝えるために、勇気を与えるために、前に進み続けます。

そのためには甲子園に出場し、試合に出て、いろんな人に知つてもらうことが大切だと思いました。ぼくも勇気をもらつた立場です。次の世代にもこの気持ちをたくしていきたいです。

ぼくの「野球」で一番印象にのこつてているのは、第九十一回夏の甲子園決勝「日本文理対中京大中京」の試合です。大差がついてもあきらめないで粘り強いプレーをする姿勢がいまもぼくの目に焼きついでいます。

この試合で学んだことは、可能性を信じてプレーすれば可能性はみえてくる。「日本文理の夏は終わらない」この言葉がぼくに信じる気持ちをくれました。おかげで仲間を信じることで、全力でプレーができます。

「つまらない」からはじったことも、努力すればするほど「楽しい」に進化してきました。この進化のおかげでいまのぼくがあります。野球も、サッカーも、算数もです。
ぼくは、ハンデなんかに負けません。常に信じて、あきらめません。これからも野球をがんばりたいです。

